

## 73. 第2次世界大戦に参戦したハワイ移民の重層的関係性に関する研究 －移民2世の生と死の記録を通じて

同志社大学 <奄美－沖縄－琉球>研究センター 嘱託研究員 金 美佞

### 概要

本研究は、第2次世界大戦期にハワイで生まれ育った韓人（コリアン）および沖縄系移民2世の戦争参加経験を分析し、帝国主義・植民地主義・人種化・市民権が交差する「位階的接触地帯（hierarchical contact zone）」における多層的アイデンティティ政治のメカニズムを解明することを目的としたものである。

従来のハワイ移民研究は、日系アメリカ人を中心とする「模範的少数者」言説の再生産や、単一民族中心の移民史叙事に偏りがちであった。本研究は、日本帝国の被植民者でありながら米国社会では「日本人」として一括りにされた韓人と沖縄系2世の経験に注目し、従軍を通じた「戦略的市民性の遂行」、すなわち忠誠心の証明・日系との差別化・祖国解放への間接的貢献という三層構造を実証的に明らかにした。理論的には、Mary Louise Prattの接触地帯論を批判的に拡張し、「位階的接触地帯」という新たな分析概念を提示した。

東京・京都・沖縄・ハワイ・ソウルでの現地調査を実施し、一次史料の収集と関連研究者との意見交換を重ねた結果、研究論文「帝国の間の境界人たち－ハワイ韓人・沖縄系2世の戦争経験と多層的アイデンティティ－」を完成させた。また、国際学会および国内研究会での報告を通じて成果を発信した。

### 研究の背景と目的

ハワイには19世紀半ば以降、プランテーション経済を背景に中国人（1850年代～）、日本人（1880年代～）が流入し、続いて沖縄人（1900年～）、朝鮮人（1903年～）、フィリピン人が順次大量に移住したことで、複雑な民族的位階構造が形成された。1898年のハワイ合併後、米国は太平洋への政治・軍事・経済的影響力拡大の拠点としてハワイを活用し、砂糖プランテーションを中心とする資本主義体制の拡大は外部労働力への需要を急増させた。

朝鮮人移民と沖縄人移民は、ともに日本帝国の支配圏に置かれながらもハワイ社会では互いに異なる適応戦略を採り、さらに本土日本人（ナイチ）からの差別も受けるという重層的な周辺化を経験した。Jonathan Okamuraはハワイを「多文化の楽園」と見る支配的な見方に異を唱え、実際には中国系・日本系・白人が社会経済的に支配的な位置を占め、ハワイ先住民・フィリピン系・サモア系等は構造的に周辺化された民族的不平等体系の中に存在していたと指摘する。白人支配層（ハオレ）が最上位の権力を独占し、中間管理職にはポルトガル系や一部日本系が配置され、最下層の労働力は韓人・沖縄系を含む多様なアジア系移民が担った。こうした構造の中での民族間差等賃金制と職務分化は、労働者間の連帯を分裂させる効果をもたらした。

こうした構造的條件は、属地主義により米国市民権を取得した2世の世代にも深く影響した。1941年の真珠湾攻撃以後、韓人・沖縄系2世はともに「敵国国民」と同一視され、自らの忠誠心を証明すべく従軍を選択したが、その動機と経験は単純な「愛国」や「同化」では説明できない多層性を帯びていた。先行研究は日系アメリカ人の戦争体験を中心に蓄積されてきたが、韓人と沖縄系をその内部の下位集団として比較分析する構造的・政治的研究は不十分であった。

本研究は、こうした先行研究の空白を埋めるべく、「ハワイ移民2世は帝国と植民地、市民権の間で自らの位置をどのように認識し、戦争参加を通じてアイデンティティをいかに再構成したか」という問いを設定し、脱植民地主義と交差性の理論的枠組みから解明することを目指した。

## 研究の経過

本研究は、文献調査・現地調査・研究者との意見交換を三本柱として進めた。助成金は主に現地調査の旅費、資料購入費、および日本国内での研究補助者への謝金に充てた。

まず日本国内では、東京（2025年7月29日～8月2日）において国立国会図書館および在日韓人歴史資料館での資料調査を実施した。京都（同年8月8日～12日）では同志社大学図書館等で関連文献を調査するとともに、ハワイ社会史及び移民研究の専門家との面談を行い、ハワイ移民研究に関する重要な示唆を得た。沖縄（同年8月26日～30日）では沖縄県立図書館を中心に、ハワイ移民関連資料の調査を実施した。なお、ハワイからの帰還移民への聴取調査についても当初計画していたが、関係者の紹介を受ける段取りまでは整えたものの、調査費の制約から期間内に現地での対面調査は実現できず、この点は今後の課題として残った。

京都には同年11月17日～20日にも再訪し、富山一郎教授（奄美沖縄琉球研究センター所長）が主催する火曜会において本研究の関連テーマで報告を行い、参加者から多くの貴重な助言を得た。同会を通じて関連分野の研究者との意見交換を行い、以後継続的な研究交流につなげることができた。また、立命館大学国際平和ミュージアム平和研究センターおよびコリア研究センター（RiCKS）を訪問し、関連資料の追加調査を行った。なお、日本国内での各種資料収集や調整については、研究補助者に委嘱して効率的に進めた。

韓国では、ソウルの国立中央図書館および国会図書館において、事前にオンラインで資料をリスト化したうえで効率的に調査を進めた。

ハワイ現地調査については、2025年6月に別日程で1次調査（ハワイ大学韓国学研究センター、沖縄コレクション、ハワイアンコレクション中心）を実施した。貴財団の助成による調査は2026年2月5日～14日に実施し、前回の調査を踏まえた追加資料の収集に集中した。特にハワイ大学ハミルトン図書館アーカイブおよびハワイアンコレクションでの資料収集に注力した。さらにハワイ沖縄センター（Hawaii Okinawa Center）を訪問し、沖縄系コミュニティによる移民の歴史と文化の継承活動について調査したほか、関連研究者との面談を通じて沖縄系ハワイ移民研究の最新動向に関する意見交換を行った。なお、当初計画していた現地でのインタビュー調査については、研究対象である第2次世界大戦期の移民2世の大半がすでに故人であり、生存者も極めて高齢であることから、ハミルトン図書館アーカイブ所蔵のオーラルヒストリー資料の収集をもって代替した。

## 成果

上記の調査をもとに、研究論文「帝国の間の境界人たち—ハワイ韓人・沖縄系2世の戦争経験と多層的アイデンティティ—」を完成させた。当初の申込時の研究テーマを、調査の進展に伴いさらに精緻化したものである。以下に主要な知見を述べる。

第一に、1940年代以前のハワイにおいて韓人と沖縄系移民が経験した重層的な位階構造の実態を明らかにした。プランテーション経済に基づく人種的労働分業体制のもとで、両集団はともに最下層の労働者として位置づけられながらも、母国での植民地的位階意識を移住先でも再生産していた。韓人移民は1910年の日本による植民地支配以後「日本国籍者」として扱われ、外見上も日本人と混同されたが、基督教を基盤とした独自の共同体形成と独立運動組織を通じて、日本人とは明確に異なるアイデンティティを維持した。一方、沖縄系移民は日本国籍者でありながらも本土日本人から言語的・文化的差別を受け、「ブタ・カウカウ」等の嘲笑を浴びるなど、日本系内部で周辺化された。特に沖縄系労働者が本土日本人管理者からの蔑視に対し「チョリンボー」（朝鮮人を蔑む表現）と呼び返すエピソードは、被植民者集団内部での位階の再生産を端的に示していた。

第二に、韓人・沖縄系2世のアイデンティティ形成が、「出生地・法的地位・家庭内の文化的伝統・社会的排除」等の多重条件の交差の中で行われたことを明らかにした。韓人2世は教会と民族主義団体を通じて民族解放運動の理念と道徳的義務を教育される一方、ハワイの公立学校を通じて米国的価値観を内面化し、二重の文化環

境の中で成長した。オキナワ系2世は本土日本人からの差別に対して、逆にオキナワ固有の文化と言語への自負心を育て、共同体内部の連帯を強化する戦略を発展させた。しかし、主流米国社会がすべてのアジア系を同様に差別し、オキナワ人と本土日本人を一緒に「ジャップ (Japs)」として括ったため、両集団間の格差は外部からは見えにくくなっていた。

第三に、韓人2世と沖縄系2世の従軍動機および戦時経験が質的に異なる多層性を持つことを実証した。韓人2世にとって従軍は、「米国市民としての忠誠心証明」「日系との差別化によるアイデンティティ確立」「祖国解放への間接的貢献」という三つの層から説明できる。鄭斗玉の『在米韓族独立運動実記』によれば、ハワイ地域から600名を超える韓人2世が米軍に入隊し参戦した。韓人共同体は国民会、同志会等の民族団体と教会ネットワークを通じて、兵士募集、戦争債券販売、義捐金募集等の戦時貢献活動を組織的に展開し、「韓国勝利推進運動」では26,265.35ドルをルーズベルト大統領に送るなど、集団的な忠誠心の可視化に努めた。

一方、沖縄系2世にとっての従軍は質的に異なる次元の苦悩を伴った。法的には日本国籍者でありながら文化的には差別を受ける集団として、「日本人」という烙印を脱するために自発的に入隊した者もいれば、収容所に収監された親世代の早期釈放のために軍務を選択した者もいた。とりわけ沖縄戦(1945年4月～6月)への派遣は、多くの沖縄系兵士に深刻なアイデンティティの混乱と内的葛藤をもたらした。沖縄県平和祈念資料館の資料によれば、沖縄戦には最低322名の語学兵(日系通訳兵170名、語学兵152名)が投入され、祖父母や両親が沖縄県出身の語学兵が集中的に配置された。多くの沖縄系兵士が自らの家族や友人、故郷に銃口を向けねばならない状況に置かれ、激しいアイデンティティの混乱と内的葛藤を経験したとされる。

第四に、帰米(キベイ)2世の経験を分析することで、ナショナル・アイデンティティの重層性がより鮮明になった。日本で教育を受けた後にハワイに帰還した沖縄系キベイ2世のうち、一部は日本軍に志願し「大和精神」を試された。ナカムラ・リュウジの事例では、16歳で日本海軍学校に出願して「あなたはアメリカ人だ。大和精神がない」と拒否された後に再挑戦して合格し、人間魚雷操縦士にまで志願した。反面、米国に帰国したキベイ2世はFBIの監視下に置かれ、「日本軍での経験を語るな。戦時中に日本側についた者は米国市民権を失う可能性がある」という警告を受けた。こうした事例は、同一世代の中でも帝国の引力が相反する方向に作用していた実態を如実に示している。

理論的には、Prattの接触地帯論を批判的に拡張し、「位階的接触地帯(hierarchical contact zone)」という概念を提示した。これは、(a)複数の帝国主義的権力が競合する空間、(b)人種化された労働体系を通じて移民集団間の位階と競争が構造化される場、(c)差等的市民権体制のもとで少数者が異なる戦略で政治的承認を追求する政治的舞台、としてのハワイを分析する枠組みである。この概念は、Bhabhaの混種性やSpivakの下位主体性といった既存の脱植民地主義理論が持つ限界―特にアジア系移民の二重的周辺化の実態を十分に説明できない点―を補完し、単一国家・民族の叙事を超える超国的アイデンティティ政治の分析に有用な道具を提供するものである。

## 今後の展望および課題

本研究は当初の「国民国家の後を想像する」という大きな問題意識のもとで進められており、今回のハワイ移民2世研究はその第一段階と位置づけている。今後は以下の課題に取り組む予定である。

第一に、ジェンダーの視角からの分析の補充である。移民女性の戦時経験やジェンダー化された市民権言説についての分析は、今回の研究では十分に行えなかった。今後の追加調査や文献分析を通じて補完する必要がある。

第二に、ハワイ先住民とアジア系移民との関係、とりわけ「アジア系入植者植民地主義(Asian settler colonialism)」の問題についての考察を深めることである。移民2世の市民権獲得は、同時に先住ハワイアンの主権の侵害にも連なる構造を持つが、この点は今後さらに検討が必要である。

第三に、沖縄でのハワイ移民帰還者への聴取調査の実現である。今回は調査費の制約から対面調査を実施できなかったが、関係者の紹介を受ける段取りは整えており、次の機会に実現したい。

研究成果については、2026 年上半期中に英文学術誌もしくは韓国研究財団登載誌（KCI）への投稿を予定している。また、「国民国家の後を想像する」という大テーマに向けて、ハワイに限らず世界各地のディアスポラの経験を比較する後続研究へと発展させることを目指している。

（完）

### 発表論文

- 1) 「帝国の間の境界人たち—ハワイ韓人・沖縄系 2 世の戦争経験と多層的アイデンティティー」（英題：Borderland Subjects Between Empires: War Experiences and Multilayered Identities of Second-Generation Korean and Okinawan Immigrants in Hawai'i [仮題]、2026 年上半期中に英文学術誌 [SSCI/A&HCI] または韓国研究財団登載誌 [KCI] に投稿予定)
- 2) 帝国の間の境界人たち—ハワイ韓人・沖縄系 2 世の戦争経験と多層的アイデンティティー」、IPSA (International Political Science Association, 国際政治学会) 2025 年度世界大会、2025 年 7 月 (於 韓国) [口頭発表]
- 3) 「帝国の間の境界人たち—ハワイ韓人・沖縄系 2 世の戦争経験と多層的アイデンティティー」、火曜会 (富山一郎教授主催、奄美-沖縄-琉球 研究センター)、2025 年 11 月 (於 京都) [口頭発表]

### 引用文献

- 1) Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. New York: Routledge, 2003.
- 2) Okamura, Jonathan Y. *Ethnicity and Inequality in Hawai'i*. Temple University Press, 2008.
- 3) University of Hawaii at Manoa. *Ethnic Studies Oral History Project*. Uchinanchu, a history of Okinawans in Hawaii. University of Hawaii at Manoa, 1981.
- 4) Kim, Lili M. "The Limits of Americanism and Democracy: Korean Americans, Transnational Allegiance, and the Question of Loyalty on the Homefront during World War II." *Amerasia Journal* 29.3 (2003): 79-96.
- 5) Nordyke, Eleanor C. *The peopling of Hawaii*. University of Hawaii Press, 1989.